



高校教員から見た 『ジーニアス和英辞典』



萩野俊哉

和英辞典は発信用のみに用います。ふつう発信しないような必要以上に難しい英語の語彙や言い回しは和英辞典には必要ありません。また、この『ジーニアス和英辞典』の対象ユーザーは高校生と一般人であり、専門家や研究者を意識したものではありません。

第3版の編集作業の一環として、多くの教員が「素読み」を行いました。これはゲラ（校正刷り）をそのような観点で通して読み、内容に関する問題点や疑問点（場合によってはそれらの解決策も）を指摘することでした。具体的にはその作業は2つに分かれます。最初に行う「素読みA」では、ほぼ用例だけを徹底的に読み、ターゲット部分に照準が当たっているか、記述内容が正確か、わかりやすく user-friendly か、発信（書く・話す）に役立つか、応用が利くか、といった点を中心に、用例として適切かどうかを点検しました。その後、「素読みB」では、英語中見出しと用例の整合性がうまくとれているかの確認をはじめ、全体的・総合的な確認を行いました。

たとえば、「素読みA」の一例として、「都内」という見出しについて、次のような用例がありました。「彼は1990年に東京に来て、それ以来都内に住んでいる He came to Tokyo in 1990 and has lived here since then.」

日本語「都内（に）」に対応する英語が here となっています。文としてはこれが自然なのでしょうが、「都内」の用例としては意味がありません。修正を求め、最終的には適切な用例に改められました。

「素読みB」の例としては、たとえば「会談」という見出しがあって、中見出しとして talks, conference の2語が与えられているとします。ところが、用例を見ると meeting が使われている例がいくつかあります。中見出しに meeting を追加すべきではな

いかとゲラにコメントし、結果そのようになりました。逆に、「獲物」の中見出しに catch があるのにその用例が見あたりません。catch を削除するか、あるいはその用例を追加するかとコメントし、結果削除となりました。

次に、高校生の学習という観点からこの辞書の活用方法を考えてみましょう。それはすなわち、第3版の次の特長を生かした活用方法ということになります。

(1) ほぼすべての日本語の見出しについて英語の中見出しがついており、とりあえず知りたい情報が素早くわかる。

(2) その中見出しが英文中でどのように使われるかが、わかりやすい用例で示されている。

(3) 見出しを含む英訳しづらい日本語には、英訳しやすい日本語の言い換え表現が付記されている。

(例) いいかお [いい顔]

私は彼につい顔をしてしまう [=いつも彼を喜ばせようとする] I'm always trying to please him.; [=彼に寛大すぎる傾向がある] I tend to be too generous with him.

(4) 特に語法等に関する注や補足説明が充実している（まさに Genius の「伝統」が生きています）。

要するに、高等学校において英作文の指導をする際にとっても役立つ辞典である、ということです。英語を比較的すらすら書けるような生徒にとっては、ちょっと引っかけるところを引いて「読み込む」ことで多くの有用な情報が得られるでしょうし、英語が不得手な生徒にとっては、与えられた日本語を英語に直すときや、自分の言いたいことを英語で言おうとする際には、わかりやすくストレートに求める答えを与えてくれる、そんな心強い「頼りになる」和英辞典だと思います。

（はぎの しゅんや・新潟県立高田高校副校長）